

序文では、唐代前期の政治と軍事をめぐる先行研究の成果を瞥見し、残された課題について検討した。有史以来、軍事力は「社会」「国」「国家」を支える最も強力な基盤の一つである。前近代の中国においても同様に、兵制の確立こそが国家の安定を担保するものであった。中国歴代の王朝は多くの場合、戦闘員と非戦闘員を戸籍によって区別した「兵民分離」体制で軍事編成を行い、皇帝直属の親衛兵（禁軍）をその主力に据えた。兵力を専門化し王権に直結させることで、その強度を維持したのである。ところが唐王朝の場合、少なくともその治世の前半期にあつては、「兵民一致」を原則とする府兵制によって、国家軍の運営がなされていたと考えられている。西魏より唐・玄宗朝に至るまで続くこの特殊な形態については、そのありかたをめぐって、これまで膨大な論考が蓄積されてきた。

その一方で、府兵制の体系から逸脱した軍事力のありかたは、長らく等閑視されてきた傾向にある。たとえば近年、対外遠征の主力は、「蕃兵」と呼ばれる異民族軍団であったことが指摘され、唐の軍事力はより国際的な多元構造を有していたことが明らかになっていく。ひるがえって国内では、皇位継承が政変という形で繰り返し争われ、その際に登場する皇帝親衛兵は、政変と関連しながら独自の発展を遂げているかのように見える。このような状況を鑑みれば、唐王朝の軍事力の「強度」と「有効性」は、果たして、府兵制によって召集された府兵を中核にして成立しえるのか、という疑問が浮かび上がるのである。

本論では、これらの問題のうちの特に後者に焦点を当て、「北衙禁軍（北衙）」と称される皇帝親衛兵が、唐代前期の宮廷政治とどのように関わったのかという点を考察する。

唐代の政治史は、かつて陳寅恪氏によって見通しの大枠が示されて以来、その後、その賛否も含めてさまざまに研究されてきた。ただし、唐代前期の政局を方向づける六度の宮廷政変については、陳寅恪氏以来、政変と「北軍」とに接点があることは早くから認識されていたものの、いずれも現象の指摘にとどまり、事象を整合的に解釈する段階にまでは至らなかった。その結果、宮廷政変については、「玄武門の変」以外は、近年まで、ほとんど研究がなされていない状態だったのである。その背景には、従来の唐代兵制史研究が、府兵制に基づく南衙の分析に終始しており、北衙を、南衙システムに内包されるものとみなし、それ自体の意義をほとんど顧みなかったことにある。しかしながら、唐代前期の政変と北衙の存在は表裏一体であり、北衙に関する知見なしには、政変のからくりは解けない、といわねばならない。従来、この点が看過されてきたことによって、当該期の政治史は十分理解されてこなかったのである。

そこで、本論では以下の五つの問題を設定し、それぞれに対応して各章を設けた。すなわち、①宮廷政変とはどのような形をとって現れ、その動きに北衙はどのように関係するのか。②北衙の発展と政変とはどのような関連があるのか。③北衙の騎馬軍団体制とは

いかなるものか。④その北衙への馬の供給はいかにしてなされるのか。⑤前期北衙は玄宗期以降はどのような形態に変化するのか、のごとくである。各章における検討結果をまとめれば、次のとおりである。

第一章「唐代前期宮廷政変をめぐる北衙の動向」ではまず、宮廷政変という事象に北衙がどのように関わったのかを明らかにするべく、唐代前期に勃発する六度の宮廷政変のうち、北衙が関与する五つの政変（「中宗廢位の変」・「誅張易之兄弟の変」・「李重俊の乱」・「誅韋后一派の変」・「誅太平公主一派の変」）を帰納的に分析した。唐代前期の宮廷政治史を方向づける最大の特徴は、後継者どうしの武力衝突によって、王権が繰り返して争われてきたことにあるといえよう。そして、政変の画策から収束、政権交代に至るまでには、セオリーとも呼ぶべき一定の法則が存在するのである。第一に、政変の成否は北衙の掌握にかかっている。騎馬を主力とするその機動性の高さを利用し、実働部隊として相手方に差し向けることができた陣営が勝利するのである。ただし、皇帝親衛兵である北衙の兵権を事前に確保するには、それなりの権力と権威が必要とされるため、政変前夜には、これをめぐって官僚たちが暗躍したものと思われる。第二に、政変決行の際には、後継者勢力による皇帝の身柄の確保が迅速に行われなくてはならない。それが自己の正当性を主張することにつながるからである。それは具体的には、北衙の駐屯地である宮城北門Ⅱ玄武門から宮城区域を南下することによって実現されるが、政変ごとにこの経路が繰り返して採用されるのは、それが物理的に皇帝の居所への最短距離に相当するからである。以上二つの条件を満たすことを前提に、政変の手順を整理してみると、唐代前期の宮廷政変は、①禁軍の出兵権の奪取、②北衙統帥権の掌握、③南衙への協力要請、④（北衙の出動による）宮城内の制圧、⑤君臣関係の更新、のような五段階を踏んで繰り返されるのである。唐代前期において、宮廷政変による即位の「連鎖」が解消されなかった原因は、「君臣関係の更新（安定化）」に失敗し続けた点に求められよう。

続く第二章「唐代前期における北衙禁軍の展開と宮廷政変」では、前章を承けて、唐代前期における北衙禁軍の制度的推移を確定するとともに、その変遷過程の中に宮廷政変を位置づけ、宮廷内の政治運営と北衙との関係性を考察した。第一章で述べた北衙の動向は、政変からのアプローチのみならず、北衙の起源や発展を考察するうえで総合的に検証されなくてはならない問題である。というのも、北衙の規模や軍事体制は常に一貫していたわけではなく、これらを文献史学として分析する場合には、北衙の推移を在来史書から齟齬なく組み立てたうえで、政変との関係を明らかにする必要があるからである。

北衙は、その職掌から、①太宗期の「北衙七營」「左右屯營」に始まり、高宗期に「左右羽林軍」となる宿衛兵系統、②羽林軍の内部から「百騎」・「千騎」・「万騎」と拡大を重ね、玄宗期に「左右龍武軍」に昇格する親衛兵系統、の二つに区分することができ、この両者が並立して玄宗期に北門四軍体制が完成する。このうち、親衛兵系統（Ⅱ龍武軍）の台頭と北衙の発展は軌を一にしており、最終的には、彼らは羽林軍の母体である宿衛兵系

統（Ⅱ羽林軍）と勢力を逆転させる。一方、唐代前期に繰り返し起こった宮廷政変は、複数の後継者が帝位を争うという政治上のアンバランスと、北衙の变革・発展に伴う確執とが、密接に絡み合った際に発生する。つまり、北衙の伸張と政変の勃発とは相関が見られるのである。両者の関係をさらに掘り下げれば、当該期の宮廷政変は、北衙の掌握のみならず、北衙内部の宿衛兵と親衛兵のパワーバランスの変動の上に展開すると見なければならぬ。その結果起こる「政変に勝利した側が北衙を拡大する」という連鎖によって、北衙は発展し続けた。

さて、第一章・第二章で明らかになったように、唐の北衙とは、唐代前期を通じて繰り返し返される宮廷政変との関わりの中で現出した騎馬軍団であった。そして、唐王朝一代を通じて騎馬が主力であった北衙には、閑厩（皇帝牧場）から軍馬が支給されていたのである。そこで第三章「閑厩体制と北衙禁軍」では、唐代前期の閑厩の様相と閑厩馬の運用が、北衙の歴史的展開にいかにか作用したのかを考察した。

閑厩は、唐初の「左右六閑体制」から武則天期に組織改編を経て仗内六閑が成立したのち、中宗期に仗外四閑の追加を経て、「内外閑厩体制」へと移行する。このような閑厩の拡大は、百騎（太宗期）、千騎（武則天期）、左右万騎（中宗期）、左右龍武軍（玄宗期）の沿革をたどった北衙の拡大と重なり合うものである。閑厩には、仗内六閑への転化を機に、閑厩使が誕生する。閑厩使は、騎兵である北衙とその騎乗馬である閑厩馬の結びつきを促進し、より迅速な閑厩馬の出勤に貢献した。その結果、閑厩使は、第一章で見たような、北衙を出勤させ相手方を武力制圧するという前期宮廷政変において、成否の鍵を握るほどの役職に成長したのであった。しかし、玄宗期以降はその職掌を徐々に飛龍使に奪われて形骸化した。また、国馬の総数が時期によって増減するのに対して、閑厩に収容される馬の頭数は常に増加傾向にある。その原因は、高宗期に始まる対外情勢の悪化に端を発する、外来馬の減少と監牧の機能不全によって、馬が中央に困り込まれるためである。同時に、北衙兵の員数の増加に応じた北衙馬の需要の増加もそれに拍車をかけたと考えられる。

第四章「厩馬と馬印―馬の中央上納システム―」では、前章での検討結果を承けて、「そもそも北衙への軍馬供給はいかにしてなされたのか」という疑問に答えるべく、唐代前期の馬の上納システムを中心に、馬の管理のありかたを分析した。唐王朝所有の馬は、地方の官営牧場である監牧と中央の皇帝牧場である閑厩で管理され、この二つの機関は経営の両翼をなしていた。しかしながら従来の研究はともすれば監牧の考察に集中しがちであり、閑厩については副次的な関心しか払ってこなかった。無論、監牧の成り立ちとして大きな問題には相違ないが、王朝にとっての馬政とは、馬の蕃育もさることながら、良馬をいかにして中央に集めて運用するかが重要な命題となるはずであろう。前近代の王朝にとって良馬の確保は、軍事力の強化に直結すると同時に、皇帝の権威に直接関わるからである。したがって、唐代の馬政を考える際に、閑厩のありかたと閑厩を中心とする京師の馬（Ⅱ厩馬）の検討は、避けては通れない問題といわねばならない。

唐の馬政において、「厩馬」は監牧馬と外来馬によって補充される。このうち、経営上の核となるのは監牧からの上納である。厩馬の上納には、監牧↓太僕寺（太僕寺上納馬）と監牧↓殿中省（殿中省上納馬）の二種類があり、二つのルートは全く別の経路であるが、上納されたのはいずれも三歳・四歳馬であったと考えられる。この上納のための良馬の選抜を馬印行政によって分析すると、監牧馬は、殿中省上納候補馬とそれ以外の馬（監牧残留馬・太僕寺上納馬）とに選別される。前者から「飛字印」を捺される馬が選抜され、さらにそこから「三花」を捺す馬（≡閑厩馬）が決定された。また、先の選抜で「飛字印」を捺さなかつた馬の中から、あらためて「飛字印」「風字印」を捺す馬を選び、尚乘局雑馬とした。一方、後者からは、「龍形印」を捺されて太僕寺に上納される馬と、「龍形印」なしで南衙に上納される馬が選抜された。そしてこの両者、すなわち上納経路と馬印の運用を対照させてみると、「龍形印」を捺される太僕寺馬、「龍形印」のない諸衛官馬（以上、二種が太僕寺上納ルートを経る）、「飛字印」「三花」を捺される閑厩馬、「飛字印」のみを捺される閑厩雑厩馬、「飛字印」「風字印」を捺される尚乘局雑馬（以上、三種が殿中省上納ルートを経る）、のような対応関係があることが判明する。

ところで、玄宗朝に入ると、唐初より王朝を支えてきた統治体制が機能不全に陥りつつある中で、北衙もまた変質を余儀なくされた。玄宗朝末期には、安史の乱という外側からの大きな流れによって体制の枠組みが完全に破壊され、王朝は未曾有の危機を経験することになる。つまり、北衙にとっても、玄宗朝は制度の過渡期にあたるのである。そこで第五章「左龍武軍の盛衰―唐元功臣とその後の禁軍―」では、前期北衙のうち、玄宗との密接な関係性を軸に隆盛を誇った左右龍武軍に焦点をあて、彼らのありようが唐代北衙禁軍史の中にもどどのように位置づけられるのかを考察した。

唐の前半期には、普段は京師に宿衛し、對外遠征の際には配下を率いて出撃する異民族出身の將軍（≡蕃將）が禁軍中にも多く見られた。しかし玄宗朝に入ると、北辺や西域での交戦が長期化したため、このような地域に節度使と専門兵を配備せざるをえなくなり、必然的に中央から遠征に向く回数も減少した。節度使の登場によって、禁軍將軍と辺境で戦闘を重ねる將軍との分化が生じたのである。それによって禁軍は宮城での宿衛に専門化され、徐々に戦力を喪失していった。

このように北衙の内情が変化する中で、龍武軍はその中核を、玄宗が台頭する契機となった「誅韋后一派の変」での功臣、「唐元功臣」が担うことで体制を保持した。功臣たちが玄宗個人に忠誠を尽くすこの形態は、玄宗と唐元功臣亡きあととは容易に瓦解する一時的な関係でしかないのであるが、その一方で、玄宗朝当時、龍武軍は禁軍として非常に安定した強固な存在であったといえよう。唐後半期に創設される皇帝一代限りの禁軍（神策軍以外の後期北衙）には、玄宗と龍武軍との関係が強く意識されていたことが分かる。しかしながら、安史の乱後の龍武軍の消衰から唐末に至るまで、それらの新たな禁軍は、度重なる外敵の長安侵入に際して実効的な役割を全く果たせず、皇帝たちは神策軍に頼らざるを

えなかった。その結果、神策軍は単なる一辺境軍から中央禁軍の中核へとの上がり、北衛としての実質を完全に手中に収めたのである。

結語では、以上本論で述べた内容を要約し、中国史における唐・北衛禁軍の歴史的位置づけと今後の見通しを述べた。唐代前期の北衛禁軍は、王権を支える装置であるとともに、王権を再生産する装置としても機能した。これまで、この北衛の構造と性格が正面から問い直されることはなく、この点が唐代政治史を捉えるにあたって不十分であったといわざるをえない。それならば、このような装置とその機能は、中国史においてどのような意味を持つのであろうか。

唐といえ一般には、華やかな宮廷生活やシルクロードによってもたらされた国際色豊かな文化が想起されるが、実は軍事的な性格の極めて強い王朝でもあった。しかし従来、唐の軍事制度としては、府兵制によって運営される国家軍・南衛に研究が集中し、皇帝直属の近衛軍たる北衛に関する研究が進展のないままであったことは既述のとおりである。こうした状況にあつては、唐代北衛史の研究体系を構築し、その通時的研究を完成させることが急務であつた。

ところが、唐の前半期から後半期の北衛へと考察の射程を広げた時、安史の乱という現象が大きな障壁となつて立ちはだかつていることに気づいたのである。安史の乱は、南北朝時代から隋唐王朝成立へと続く歴史の流れと、唐代後期の藩鎮体制から五代十国時代を経て宋王朝を生み出す流れの転換点であり、同時にそれは中国史上の一大画期と位置づけられる。北衛史においても、前期北衛と後期北衛の間に横たわる深い断絶は、安史の乱によつて顕在化するものであり、この歴史的イベントこそが前期北衛の限界を示したものであり、同時に、後期北衛を生み出すエネルギーの源であつたといえよう。唐北衛の通時的研究のためには、前期北衛と後期北衛、そしてその間に横たわる安史の乱という未曾有の国際紛争を個別に分析する必要があり、一元的な考察では唐北衛の全貌はつかめない。そこで本博士学位請求論文では、ひとまず唐代前期の北衛のありかたに焦点を絞つてその特質に迫ることとした。

唐代前期の北衛のありかたは、五胡諸国及び北朝の形態を色濃く反映していると思われる。西魏・北周期には、北魏の内官の系譜を継ぐ「親信」「庫信」と呼ばれる王族の側近軍事集団が形成された。昨今、この親信兵とは、後代元朝における「ケシク」に相当するところが指摘されている。このような流れの中に位置づけるとするならば、唐の北衛禁軍とはまさしく皇帝の「親信」であり、ケシクとの類似性をも考慮しなくてはならない。

また、唐長安城における北衛、すなわち「親信」的軍事力が宮城の北辺を拠点とするというありかたは、北魏洛陽城の形態をモデルにしたと思われる。唐長安城における皇帝牧場としての禁苑の活用方法も、元をたどればその源流は、宮城北方に広大な禁苑を構え放牧地や軍事施設として活用するという、四世紀以降の遊牧政権樹立に伴う皇室庭園の軍事拠点化にあるという指摘がなされている。つまり、王とそれを警護する存在という構図自体はいつの時代にも見られる普遍的な現象であろうが、唐代におけるそのありかたは、北魏以来の遊牧的兵制を継承する中で生まれてきた可能性が十分にあるのである。それが、唐代前期において政治の動向と密接に絡み合い、独自の発展を遂げたのであつた。

ところが、それは安史の乱には耐えられず、たちまち崩壊してしまった。安史の乱こそが、それまでの北衙を有名無実化した、より外側からの強力な圧力であった。そしてその結果、唐代後期には、藩鎮と中央の神策軍という形態が形成された。地方に藩鎮という軍事体制が存在し、中央の禁軍はそれと対抗しつつ軍制のみならず行政にも携わるといふ形が、のちの五代十国に受け継がれ、やがては宋代のありかたをもたらしたのである。とすれば、北朝を受け継いだ唐代前期の禁軍と、宋代に継承される唐代後期の体制の画期となつたものとして、安史の乱は兵制の面からもあらためて位置づけられねばならない。

本研究は、唐前期の北衙禁軍の変遷を追うことで、唐が隋から継承し安史の乱によつて消滅したところの「帝國的支配体制」がいったいどのようなものであつたか、という問いに軍事面から迫ろうとする試みの一つである。五胡十六国時代以来、北族と漢族の折衝によつて動いてきた歴史の完成体がどのようなもので、この体制の弱点は何であつたかといふことを突き詰めていけば、前近代の多民族複合国家の姿が明らかになると予想される。したがつて今後は、安史の乱と後期北衙を切り口に、唐後半期の軍事システムを総合的に検討する必要がある。そのうえで、唐による帝國的支配の創出と消失の原因に北衙史からアプローチするとともに、唐代北衙禁軍史研究の完成を目指すこととする。